イレースの世界へようこそ

ひらめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イレースの世界へようこそ

【Ｎコード】
Ｎ９９４３Ｚ

【作者名】
ひらめ

【あらすじ】
「魔法の力を与えよう」
普通の高校生である主人公・夏目奉はゲームマニアで帰宅部。学校帰りに立ち寄ったゲームショップで、奉はうさんくさいチラシを目撃する。半信半疑の奉の前に、白のローブで身を包んだ少年が現れる。少年が力を授けると言って手を伸ばしてきたところで、橙色の髪をした美少女がスーツ姿の男とともにやってきて……。戦いあり、涙あり（？）、そして萌え要素ありのコメディにしたいと思ってます。

0

魔法、超能力、超科学、異能の力、超魔術……

そこに共通するものは、人智を超えた“力”の存在。人はいつも、そうした力を求めてきた。

旧約聖書では、十戒をまとめたモーセはユダヤ人たちをエジプト兵から守るため、地中海を割って道をつくったという。

中国・秦の始皇帝・政は不老不死の薬を求めて、部下の徐福を遠い蓬莱の国へ派遣したという。

例は挙げればきりがない。超自然的な力に対する憧れ。あくなき追求。人間ならば誰しも、本来ならば持ち得ない“力”を夢想したことがあるはずだ。

その一方で、魔法などは所詮ファンタジーの話。超能力などは妄想の話だと、ただ苦笑するしかないのも事実だ。

だが違う。違うのだ。

超自然的な力。魔法。異能の力は存在するのだ。人の体には、超自然的な力が眠っているのだ。

人を構成するプログラムの中で眠っているだけで、“力”に関する方程式は確実に存在するのだ。

キリスト教の聖書では、始原の人であるアダムとイヴは知恵の実

を食べただけで楽園を追放されたという。

だがもしも、この記述そのものが神によるいたずらだったらどうであろう。もし人が、実は生命の木の実も食べていて、それで楽園を追放されていたとしたら……

人の根源に備わっている“力”の存在。

あるとき、その事実に気がついた者たちがいた。彼らは日の当たらないところで“プログラム”の研究に明け暮れる。

驚くべき力が明らかにされていく。人を構成する幾億ものコード・パターンが解き明かされ、コード間に秘められた“力”の存在が暴かれる。

人は知恵の他に“力”をも手に入れ、神への階段を上っていく。

だがしかし……いや、やはりというべきか。

人は楽園を追放された存在であった。つまり、寝た子を起こしてはいけなかった。

眠らざる力はやがて暴走を始める。神による審判が下され、人は豹変してしまった世界をさ迷い始める。

＊＊＊＊＊＊

「あ……あ……」

少年はただ呆然とするしかなかった。

クリスマスの三日前。少年は単身赴任の親に会いに、都心へと出てきていた。

だがそこは、少年が知っているような現実の世界ではなかった。

漆黒の雲で覆われた空。冷たい風は嵐となって荒れ狂う。

半ば倒壊したビルの群れに、倒された電信柱。木の葉が暗闇の中で舞い、電線が崩れた道の上に横たわっている。

不気味な形に隆起した“丘”の上からは、無人の車が流されてくる。

少年はただ言葉を失くし、呆然と空を仰ぎ見る。

灰色の雲が目にも止まらぬ早さで東から西へ流れ、ところどころで黒い雷が走っている。

黒い雷は雷でなく、空隙だった。

「な、何でこんなことになってるの」

次の瞬間、強烈な閃光が目の前を走り抜けた。光り輝いて数秒した後、巨大な爆裂音とともに黒く巨大な煙が舞い上がる。

遠くの方でビルの崩れる音が聞こえてくる。冷たい風が少年の体に襲い掛かり、少年はその場で顔を埋める。

倒壊したビルの影に、もはや形を変えてしまった車。東京都内に不気味なクレーターが現れ、漆黒の空隙と漆黒の嵐が辺りを覆いつくしていく。

再び強烈な光が暗闇を抜けていく。少年は思わず驚き、反射的に顔を上げる。

そのとき、少年は思いがけないものを目の当たりにする。

もはや地獄と化した東京二十三区。倒壊したビルの影に隠れて、おぞましい姿をした怪物が歩いていた。

怪物はおぞましい鳴き声で咆哮し、煌びやかな閃光をまき散らす。空にできた空隙が広がっていき、漆黒の嵐はブラックホールとなって一切のものを飲み込んでいく。

少年はただ駆け出していた。少しでも怪物の傍から離れるために。そして、迫り来るブラックホールから離れるために。

――――２０２１年１２月２２日　「サード・イヴ」の惨劇の記録

1

少し冷たい風が室内に入り込む。白いカーテンがはためき、清清しい朝を運んでくれる。

まどろんだ意識の中で、少年は目を開いていく。もう少し眠っていたいが、先ほど見ていた夢が頭から離れなかった。

またサードイヴのときの夢だ。

少年はベッドから起き上がると、無造作に頭を掻く。室内は空気が滞留していて、どこか薄暗い。

ベッドの傍に置かれた目覚まし時計を眺めてみる。まだ朝の六時にもなっていないようで、学校に行くまでまだ時間がある。

「まだあのときの夢を見やがるのか、クソ」

少年は舌打ちを繰り返す。もう三年ほど昔の話だというのに、地獄絵図のような東京の光景をまだ忘れられずにいる。

サードイヴとは、２０２１年１２月２２日に起こった惨劇の通称である。

後の日本政府の公式見解では、数十万トンもの質量をもった超巨大隕石の落下によるとされている。東京二十三区は尽く破壊され、海に沈んでしまった。

少年は当時クリスマス前ということもあり、たまたま東京まで遊

びに来ていた。単身赴任中の父親に会うためだったが、そのときサードイヴを目の当たりにした。

変わり果てた東京の姿は、未だ脳裏に焼きついて離れない。

結局、少年はその日を境に父親の顔を見ることはなかった。

それもそのはず、東京のまさに中心で起きたサードイヴは、数十万もの死者・行方不明者を出しているからだ。

実はまだ、父親の生死はまだはっきりとわかっていない。というのは、東京の東半分が海に沈んでしまったため、行方不明者が後を絶たなかったからだ。

東京の中心で起きた未曾有の大災害。サードイヴ以来、少年の人生は大きく変わったといっても過言ではない。

母親は父の死を甚く悲しんでいた。葬儀に遺体すら置かれていないことが、また悲しさ、虚しさを助長していた。

「だがしかし、母親ってのは強いもんだよな」

少年は思わずため息を漏らす。

サードイヴから二年後、再び少年に転機が訪れる。母親が新しい男と再婚したためだ。

父親が死んで二年という月日が早いのか遅いのか、少年にはわからなかった。ただ、いつまで悲しんでいても始まらないと思ったことは確かだ。

新しい親とどう接すればいいのだろうか。そんなことを漠然と考えていたが、義父という存在以上の衝撃を少年は受けることになる。

「おはよー」

可愛らしい声とともに、部屋の扉が開かれた。少年が顔を向けると、扉の傍に制服を着た少女の姿が見える。

「お、おはよう」

少年は引きつった笑顔を浮かべる。少女は満面の笑みを浮かべると、部屋の中へと入ってくる。

「あれぇ……お兄ちゃん、もう起きてたんだ。いがーい」

可愛らしい声が部屋に響き渡る。少年は思わずうな垂れると、ボサボサの頭を掻く。

「ねぇお兄ちゃん、朝食の準備ができたけど、食べないの？」
「……おい。その前に、『お兄ちゃん』って言うの止めてくれよ。いつも言ってるだろ」
「えー、何で？　奉（とも）お兄ちゃん」

奉と呼ばれた少年は肩を落とす。少女は不思議そうな顔を少年に近づける。

「なぁ奏（かな）。俺はお兄ちゃんじゃないって言ってるだろ。歳だって同じじゃないか」
「えー、でも、生まれはお兄ちゃんのほうが半年くらい早いじゃな

い。私、早生まれだし」
「学年が同じなのに、兄と妹ってのはおかしいだろ。変な誤解を招きかねないから、いい加減止めてくれよ」
「ふふふ……お兄ちゃん、照れちゃって可愛い」
「照れてなどないわ！」

奏と呼ばれた少女は満面の笑みを浮かべていた。丸みを帯びた頬に大きな瞳は、まるで小動物のように可愛らしい。茶色に染められた髪は細くつややかで、セミロングの長さに整えられている。

奏の可愛い笑顔に、奉は思わずドキリとする。奏はルンルン気分で扉に近づくと、顔だけを奉の方に向ける。

「早くご飯食べようよ。覚めちゃうじゃない」

奏はそう言うと、奉の部屋を離れていく。チェック柄のスカートがゆれ動いていく。

奉は呆然と扉を眺めていた。母親が再婚して一年ほど経つが、未だこの生活に慣れていない。

そう、義父以上の存在というのは、義妹・奏のことだ。奉は生まれてこのかた、初めて義妹ができてしまったのだった。

2

奉(とも)は制服に着替えると、自室を出てダイニング・ルームに向かう。テーブルにはホットケーキに紅茶、サラダが並んでいる。

「さ、早く食べよ」

義妹・奏(かな)が向かいの席で満面の笑みを浮かべている。奉は軽く頷くと、椅子を引いて腰掛ける。

「それじゃ、いただくことにするか」

「ちょ、ちょっと待って」

奉は思むろにナイフを手に取ったところで、奏が待ったをかける。

「ど、どうしたんだよ」

「どうしたじゃないでしょ、お兄ちゃん」

奏は満面の笑みを浮かべると、新聞とメガネを差し出してきた。奉は訳が分からず、渋い顔をする。

「し、新聞がどうかしたのか？」

「っもう、お兄ちゃんったら。いつもの恒例行事じゃない。ほら、早く新聞読んで」

「だ、だから何で新聞読むんだよ。俺はサラリーマンか」

「世のお父さんっていったらサラリーマンじゃん。朝は渋い顔で新聞読んで、奥さんに『おいお前、お茶』とか言うでしょ。そういうイメージでやってね」

「……それで、奏さんはどういう対応してくれるんだったっけ？」

「っもう、決まってるじゃない。奥さんは『っもう、あなたったら』って言いながら、紅茶を注いであげるんだよ。鉄板ネタでしょ？」

奉は思わずうな垂れる。朝から夫婦漫才するだけでもテンションが落ちるのに、奏の設定は熟年カップルのようだ。せめて、新婚さんの設定にしてほしいと奉は思う。

「ま、まぁとにかく食べるようぜ」
「っもう！　だから、違うって言ってるでしょ！」
「わ、わかったよ……おいお前、さっさと食べるぞ」
「んー、ちょっと違うかなー。『おいお前、さっさと先食べちまえよ』のほうが私は好きかなー」
「じゃ、俺はさっさと食っちまうぞ」

奉は素早い手付きでナイフとフォークを動かすと、ホットケーキの一切れを口に入れる。奏は丸い頬を膨らませる。

「あー、お兄ちゃんばかり先にずるーい！」
「お前こそ、さっさと食べちまえよ。朝は時間がないっていつも言ってるだろ」
「あー、その感じけっこう好きかも。ワイルドっぽくて、いかにもダンディーって感じだね」
「勝手に言ってろ！　てか、本当に時間がなくなるぞ」

奉は正確にナイフを入れると、ホットケーキを平らげていく。サラダ、紅茶の順にバランスよく食べていく。

「これでホットケーキ、サラダおよび紅茶をともに５０％ずつ平らげた。今日もいい調子だ」
「お兄ちゃんって、相変わらず食べ方きれいだよね。ちゃんと計算

して食べてるの？」
「甘いな、奏。三角食いは食事の基本だぞ。ホットケーキはきっちり八分の一ずつ。それに合わせてサラダ、紅茶を順に消費していく。これぞ、食事のザ・マナーじゃないか」
「マナーっていうより、単に潔癖症なんじゃないの」
「……何だって？」

きっちり派の奉と違い、奏はホットケーキを端から雑に食べている。また、サラダや紅茶には手をつけていなかった。

奉は眼を光らせる。

「おいお前！　三角食いをしろといつも言ってるだろ！　いい加減に覚えないか」
「えー、そんなの面倒だよ。別にどうでもいいじゃん」
「ダメだ。ダメダメ、ぜーったいにダメ。ホットケーキはきっちり八分の一ずつ。サラダにはきゅうりは入れない！　これがサラダの鉄則だぞ」
「きゅうりは単にお兄ちゃんが嫌いなだけでしょ。お父さんキャラなんだから、好き嫌いしちゃいけないんだよ」
「そういうお前だってトマトは嫌いじゃないか。だったらトマトも入れろよなー。きゅうりだけ入れるのは不公平だぞ」
「っもう、あなたったら……きゅうりきゅうりって、まるで子供みたいね。いい歳して」

奉は思わずうな垂れる。暖簾に腕押し柳のしなり。いつもこんな風にあしらわれる。女は強いというのはどうやら本当のようだ。

奏は紅茶を啜りながら、可愛い笑顔を奉に向ける。

「ほらあなた、早くして！　いつまで経っても片付かないじゃない」
「……そういうの聞いてると、まるでウチの母親みたいだな。何だか思い出すなー」
「当たり前じゃん。だってこのキャラ、お義母さんのパクリだもん」
「って、パクリだったんかい！」

＊＊＊＊＊＊

二人はオートロック式の扉を開き、賃貸マンションを後にした。高く澄み渡った空に日光が輝き、コンクリートの道やマンションの茶色い壁を明るく照らしている。

少し冷たい風が頬に当たる。清清しい秋の朝、奉は爽やかな気持ちに包まれる。

「気持ちいいね、お兄ちゃん」
「ああ、そうだな」

奏が笑顔で少し前を歩く。奉はそんな彼女の後姿を呆然と眺める。

サードイヴ以降、すっかり生活が変わってしまったなぁと思う。朝食といえば、白いご飯にシャケ、味噌汁にコーヒーというのが当たり前だった。

二人は高校生になり、遠い実家を離れて寮暮らしを始めたというのも大きな理由の一つである。本来ならば男女は別々に住むのだが、奉と奏は兄妹ということで、学園側が特別に配慮してくれたのだ。

「ねぇお兄ちゃん、見て見て」

奏が前で指を指しながら、可愛い笑顔を向けている。その指の先には、黄色や薄ピンク、橙色の菊の花が咲いている。

奉は横に並ぶようにすると、菊の花を呆然と眺める。一人で歩いていたら、まず気がつかないだろうと奉は思う。

「いい匂いだね」

「そ、そうだな」

奏はルンルン気分といった感じで前を歩いていく。奏と歩くと新しい発見はあるものの、代わりに通学時間が倍くらいになる。朝食のホットケーキや紅茶といい、奉は生活環境がかなり変わったと思う。

「これが、女の子がいる生活って奴なのかな」

奉は漫然と通りを歩いていく。通りを赤や白の車が走り抜け、別の学校の制服を着た少年たちが通り過ぎる。

冷静に考えてみれば、義妹とはいえ女の子と二人で住んでいるというのは奇妙なものだ。いくら兄妹とはいえ、よく親や学園側は同居を許してくれたものだ。

「なぁ、奏」

「なぁに？」

奏は笑顔でこちらを振り返る。大きい瞳で瞬きをし、覗き込むようにして顔を近づけてくる。

奏の無邪気な様子に、奉は半歩ほど後ずさる。
「い、いやさ、奏は気になったりしないのか？」
「気になる？　何が？」
「いや……ほら、俺と二人で住んでいる状況っていうかさ。年頃の男女が同居って、普通はなかなかないだろ？」
奏は人差し指を頬に当てて考える仕草を取る。
「んー、でも、私たちは兄妹じゃん」
「兄妹っていっても血は繋がってないだろ。しかも、まだ知り合って一年足らずじゃないか」
「私たちは他人だって言いたいの？」
奏の無邪気な瞳がうっすらと揺れ動く。奉は思わず閉口し、頭の後ろを掻く。
「いや……別に他人だなんて言う気はないけどさ」
「だったら何も問題ないじゃん。変なお兄ちゃん」
「変って……てか、こういうことって女の子のほうがナーバスにならないか？　これでも気を遣ってるつもりなんだが」
「お兄ちゃんは酷いことしないから大丈夫だもん」
奏の強い言い回しに、奉は思わず呆然とする。奏はしばらく奉の瞳を眺めていたが、近くに白い犬が通り過ぎると、奏は目を輝かせる。
知り合って一年ほどになるが、つくづく不思議な子だなと奉は思う。

天然というか、天真爛漫というか、今まで彼女のような子には会ったことがない。女性経験がそもそも少ないというのもあるが、奏は無邪気そのものだ。文字通り、邪気が感じられないのだ。

「ねぇお兄ちゃん、見えてきたよ」

奏は奉を眺めつつ、遠くを指差す。その先には、高い塀や樹木に隠れる形で白く平べったい建物が顔を出していた。建物の中央にはアナログの時計と黄金の鳥が輝いている。

二人は灰色の塀に沿って歩いていく。黒い下地の看板に、黄金の字で“西都学園”と書かれており、チェック柄の制服を着た生徒たちが中に入っていく。

ルンルン気分でキャンパス内へ入っていく奏とは対照的に、今日も面倒な一日の始まりだなと奉はため息を漏らしていた。

3

二人は学校の校舎に入り、上履きに履き替える。義妹の奏（かな）は１－Ａクラス、奉（とも）は隣の１－Ｂクラスだ。

「じゃあね、お兄ちゃん」

「おう」

奏は小さく手を振ると、Ａクラスに入っていく。奉は彼女の背中を見送ると、横のＢクラスに入っていく。

教室は少し広めで、奥に行くにつれて一段ずつ高くなっている。一段に一つの長い机が置かれ、備え付けの椅子にクラスメートたちが座っている。

まるで、どこぞの講演会場のようだと奉は思う。天上は高く、白のタイルが輝いている。窓は縦長に大きく、明るい日差しが差し込んでいる。

特に席順は決まっていないので、空いている席に腰掛ける。

「よぉ、夏目」

顔を上げると、少し長めのメガネを輝かせたクラスメートが微笑を浮かべている。

「何だよ、久保」

「何だよ、じゃないだろ。中学からの大親友を前に、随分なご挨拶だな」

「ただの腐れ縁だろうが。いきなり改まって何だよ」
久保とは中学からの腐れ縁だ。黒い髪は適切な長さで整えられ、頬のそばかすを覗けば清潔感がある。勉強も運動もそれなりにできるタイプだ。
久保と呼ばれた少年はメガネの位置を直しつつ、奉の横に座ってため息をつく。
「いいよなぁ、夏目は」
「は？　何がだよ」
「しらばっくれるなよ。いつも可愛い女の子と登校してるんだろ？　羨ましいなぁ」
「女の子って、もしかして奏のことか？」
久保は鋭い目つきで奉を睨む。メガネの位置を礼儀正しく直し、軽く咳払いをする。
「お前、いい歳をした男と女が同居するというのは、どういうことかわかってるのか？　ええ？」
「そういわれても、俺たち兄妹だからな」
「兄妹って、お前たちは血が繋がってないんだろう？　何が起きても不思議じゃないシチュエーションじゃないか」
「そんなこと言われてもな……あっちはあまり気にしてないようだけど」
久保は横でうな垂れる。わなわなと手を震わせ、机を激しく叩きつける。
「お前という奴は、全くもってわかってない。失望したぞ、夏目奉」

「は？　だから、何がだよ」
「何って、こんなチャンスないだろ。可愛い子と一緒に住んでるんだぞ。やりたい放題じゃないか」
「……お前、そんなことばっか言ってっから、いつまで経っても彼女ができないんだよ。奏に言いつけておくぞ」

久保はメガネ面をアップにして奉に迫ってくる。頬についたそばかすが妙に生々しい。

「ち、違う違う。違うぞ、夏目。俺は別に、奏ちゃんをおかずに何かしようだなんて、これっぽっちも思ってないぞ。ホントだぞ」
「……お前、そういうのマジで止めろよな。仮にもあいつは俺の妹なんだぞ。聞いててい気分しないぞ」
「だ、だから！　別に何もしてないって言ってるだろ？　お前、こんなことを奏ちゃんに言いつけてみろ。大事な友情にヒビが入るぞ」
「こんなこと言えるわけないだろ！　俺まで変態扱いされちまうよ」

奉は思わずため息をつく。

久保はパッと見はもてそうなタイプなのに、浮いた話を聞いたことがない。属性が変態というのが悔やまれてならない、そんな男だ。

しかもこの男、どうやら義妹の奏に気があるようだ。義妹ができてからというもの、何かにつけて奉に接近してくる。

「ところで夏目、あの件はどうなったんだ？」
「は？　あの件？」
「だからほら、あれだよあれ。奏ちゃんとのデートの約束。まさかお前、大事な友人との約束を忘れたのか？」
「……お前ってホント、いつも前向きだよな。もはや尊敬に値する

よ」

やがて先生が教室に入ってきて、久保は慌てて自分の席に戻っていく。帰り際に「頼むぞ」と言って、奉の肩を何度も叩いていく。

奉はそんな友人の後姿を眺めつつ、ふと義妹の顔を思い出していた。

＊＊＊＊＊＊

「あー、やっと終わった」

終業を知らせるチャイムが鳴り響き、奉はその場で体を伸ばす。

奉たちが通う西都学園では、授業は午前と午後で二コマずつだ。一見すると少なく感じるが、一コマが七十五分あり、大学の講義並みだ。

そのため、一日が終わる頃にはもうぐったりだ。

「大分お疲れのようだな」

長いメガネの位置を正しつつ、腐れ縁の久保が不敵な笑みを浮かべている。

奉は思わずため息をつくと、その場でぐったりする。

「授業が終わるなり何だよ。何か用か？」
「お前、どうせこのまま帰るんだろ？　俺もちょうど帰ろうと思っていたところだ」
「とか何とか言って、どうせお前の目当ては奏だろ。あいつ、今日は遅くなるって言ってたぞ」

奉はしたり顔でカマを掛けてみる。久保は決まり悪そうな顔をすると、顎に手を当てて考える仕草を取る。

「待て、待て待て、ちょっと待て。この久保隼人、ただいま思考中だ」
「……おい。いくら何でもわかりやすすぎだろ。さすがに蹴りいれるぞ」
「スマンスマン、今日は帰りに生徒会があったんだった。ということで、シーユーネクストアゲン」
「お前、生徒会なんてやってたっけ」

親友の久保は生徒会があるとか何とか言ってどこかに消えていく。奉は呆れつつ、教科書をバッグに入れて教室を出る。

奉は特に部活動をやっていなかった。なので、授業が終わればそのまま直帰というのが基本だ。

奉は帰り際に隣のＡクラスを覗いてみる。義妹と一緒に帰ろうと思ったが、どうも姿が見当たらない。

どうしようかと思っていたところに、奉の存在に気がついた女生徒が近づいてきた。

「ひょっとして夏目君？　奏ちゃんだったら、今日は早引きしたわよ」
「早引き？　あいつ、もしかして具合が悪かったのか？」
「それはわからないけど、あまりそういう風には見えなかったけどな」

奉は呆然と考えを巡らす。今朝の様子は……と考えてみるが、とても具合が悪そうには思えなかった。むしろ、朝からしょうもない夫婦漫才をするくらい元気だったような気がする。

女生徒は、そんな奉の様子を見ると意味あり気な笑みを浮かべる。

「夏目君と奏ちゃんって、随分と仲いいわよね」
「な、何だよいきなり。俺たちは兄妹なんだから、当然じゃないか」
「兄妹って言っても血が繋がってないんでしょ？　それなのに……ねぇ」

奉はふいに顔が熱くなってきた。気まずくなったので、手短かに礼を言ってその場を離れていく。

高校生になって早半年ほど経つが、もはや奉と奏の関係は周知の事実だった。奉はため息を漏らす。

そのまま校舎を出ると、ひとり寂しく学園を後にしていく。空には少し落ちた太陽が黄金色に輝いており、頬に当たる風は肌寒い。

登校はいつも義妹と一緒なのだが、帰りはこうして別々になることが多い。

学園に来るのは一緒なので、帰りまでわざわざ……というのもあ

るが、何より都合が合わないことのほうが多かった。奏が早引きしたり、帰りが遅くなることが多いからだ。

「全くもって女心はわからん。朝は一緒に行きたがるくせに、帰りは別々の方がいいのかな」

奉はふいに、心に隙間ができたような気分になる。

奏はいい子だと奉は思う。少し天然ではあるが、根が純粋で人懐っこく、騙すより騙されるタイプの女の子だ。

とても好感がもてるキャラだし、兄妹の仲は悪くはない。そのはずなのに、どこかで隙間というか、距離がある。

「奏も一見無邪気そうだけど、実は……なんてことがあるのかな」

何度か聞いてみようと思ったことはあったが、結局聞けずじまいというのが現状だ。一緒に暮らしてはいるが、微妙なところには踏み込めずにいる。

奉は何だか気落ちしつつ、人通りの多い繁華街を通っていく。

表の通りは二車線で、色とりどりの乗用車や運搬用トラック、商業用バスが過ぎっている。

「あー、つまらねぇ」

奉は呆然と空を眺めてみる。綿菓子のような白い雲が、風に乗ってゆっくりと西から東へと流れていく。

今の自分の姿は、まさに流れる雲のようだと感じていた。日々移り変わっていく環境を、ただ流れていくだけの毎日。

「このままっすぐ帰っても暇だし、ゲームでも見て行くかな」

奉はひとり呟くと、方向を変えて繁華街に入っていく。

商業用テナントビルが立ち並び、都市銀行やコンビニエンス・ストア、ＣＤショップにデパートなどが並んでいる。

奉行き付けのゲームショップは、繁華街に入って少し歩いた先にある。暇さえあれば、ゲームを眺めていることが多い。

特に何かやりたいゲームがあるわけではない。特に今はまっているゲームもない。

別にやりたいことがないから、漫然とゲームショップに行く。ただそれだけのことだ。

例え義妹ができようとも、根本のところではあまり変わっていない。気がつけば、日常に吸い込まれている。

――――しかし、少年は知らなかった。

何の変哲もない日常など、ほんの些細な神のいたずらで脆くも壊されるということを……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9943z/

イレースの世界へようこそ

2012年1月5日23時51分発行